

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫

◆◆◆ No.0524 ◆◆◆

19/03/06

【「一年でもっとも動く3月相場」、果たして今年は!?】

1月の月間変動幅は5.90円、2017年9月(5.94円)以来の大相場を記録したこともあり、「2ヵ月連続の大変動」が期待された2月相場だったが、結果は完全な期待外れに終わっている。月間変動幅は2.76円で、1月の半分以下だった。

そんな2月相場を受けた、足もと3月相場の動静を考えた場合、性懲りもなく「再び大相場をたどる可能性がある」と言うのも、経験則的に見て、3月相場は平均すると「一年間で一番大きく動く月」とも言える状況となっているからだ。確かに、3月入りしてからまだ数日しか経っていないが、早くも年初来のドル高値を更新するなど、なにやら次に向けた動きの萌芽も観測されはじめている感がある。月末にかけて、さらに活発な動きが続くのだろうか!?

◎勝敗はほぼ五分、「本邦期末で円高有利」とはならず

当レターの恒例となっている経験則から見た月間見通しで、先に終わった2月相場について、筆者は「動くときには大きく動くが動かない年はまったく動かない」という両極端になり易い傾向を指摘したうえで、「動かないときはドル/円だけに限らない。ユーロ/円やポンド/円など円絡みの通貨ペア全般で動きが鈍くなる傾向がある」と一などレポートした。

改めて、2月相場を振り返ってみると、先で指摘したようにドル/円は確かに小動き。また、ユーロ/円も月間変動幅が2.7円強、豪ドル/円は2.4円など、クロス円もこぞって小動きだった。唯一の例外はポンド/円だが、こちらに関して言えば円よりもポンドを主として動いた感を否めず、少し毛色が違うのかもしれない。

ともかく、1月大相場、2月は小動きと年初2ヵ月がそれぞれ対照的な値動きをたどるなか、果たして足もとの3月相場は如何なる変動が予想されるのか、やはり過去の経験則を参考に以下で考えてみたい。

特徴などを考える前段階として、1990年以降昨年まで29年間の「勝敗」を最初に振り返っておくと、14勝15敗でほぼ互角となっていた。一般的には、「3月決算期末に向けたリパトリエーション」など幾つかの需給要因・決算対策もあり円高有利かと思いきや、意外にも方向性は明確となっていないようだ。

しかし、3月相場には別に大きな特徴があり、それが「方向性を別にして平均すると、年間を通してもっとも値動きのある月」であると言うことになる。とくに2000年以降、近年にその傾向が強い。

実際、喫緊の事例をひとつだけ挙げると、2011年が月間変動幅7.05円で同変動率1位となるなど、2000年以降昨年までの19年間でデータを取ると変動幅1位が4回、2位は3回と年間を通した大変動の3分の1以上が3月に集中していた。また、過去19年の3月の平均ドル/円変動幅はおおよそ5.63円で、これは年間を通じた第1位だ。今年の3月相場も例年通り、大きな変動を期待してよいのかもしれない。

一方、過去の3月を歴史的な面で振り返ると、興味深い事象が2つ浮かがる。

ひとつは、先にも記したように、日本企業の多くが決算期末にあたるのが影響しているのか、「企業破綻」や「損失公表」といったニュースが多くみられること。そしてもうひとつは、「為替や金融市場に関する、歴史トピックスが少なくない」ことだろう。

後者についてのみ典型事例を示せば、やはり1933年のルーズベルト大統領による「ニューディール政策」発表だろうが、ほかに1ドル=360円の固定相場制導入を決定した1949年の「ドッジライン」発表、1953年の日本株大暴落(通称「スターリン暴落」)などのほか、もう少し具体的なマーケット寄りの事象として、「NYダウが初めて1万ドル突破(1999年)」、「ドル/円が1995年に記録した戦後最安値を更新(2011年)」

注: 安値を更新しただけで、大底75.57円示現は同年10月一などがすべて3月中に起こっている。もちろん、こうしたことは毎年確実に起こるわけではない。しかし、それでも頭の片隅にリスク要因として留めておいて損はない気がしないでもない。(了)

当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。